

## 歯は知れぬものごとがたんだ フランス流シチューの大秘話

太陽王の尊称を持つルイ十四世は、文字通りフランスの黄金時代にふさわしい異色の王だった。広大華麗なベルサイユ宮殿を造営し、数百人の料理人を抱えて、しばしば全ヨーロッパの目を見張らせる饗宴を催した。

フランスの古典料理は、この時期、飛躍的な進歩をみせたが、なにしろこの王は、料理人全員を士官待遇にし、宮殿内での帯剣を許すほど料理人を好遇したからである。

が、ルイ十四世には、こうした表面的な事跡からだけではうかがい知ることのできない、もっと驚嘆すべき偉大さがあつた。その隠れたエピソードを知ると、ルイ十四世がまさに不屈の人であつたことがわかる。

王には三人の侍医がいたが、当時、ヨーロッパ最高の大学といわれたパリのソルボンヌ大学には、その「ヨーロッパで最高」の名声からはおよそ信じられないような「迷妄」が支配していた。

わが国にも「口は禍いのもと」ということわざがあるように、当時のソルボンヌ大学の医学部では「歯は禍いのもと」と固く信じられていたのである。ルイ十四世の侍医たちは、あらゆる病気は歯を介して伝染すると考え、だから王たるものは、歯が健康なうちにこれをこ

とごとく抜き去らなければならないと主張した。

そこで、当時、壮年期にあつた王に抜歯をすすめ、初めはもちろんルイ十四世もこれを拒んだが、侍医たちはたくみに王を説得し、ついに歯を一本も残さず抜歯してしまった。しかも、まったく「麻酔なし」にであつた。

ルイ十四世は、さいわいこの無茶な大抜歯によって命を落とすことはなかったが、その結果は思わぬところに波及し、以後、ルイ十四世の口にする料理は「たつぷりと火を通したものに」に限られることになったのである。

歯なしの太陽王のために、とくに肉は何時間も時間をかけて煮込まなければならなかった。そのために、肉の調理法の技術が発達し、なかでもフランスが誇るシチューの技術は、この「王の災難」によって格段の進歩をとげた。

また、ルイ十四世は、フランス史上でも指折りの大食漢としても世に知られているが、この歯なしの事実をふまえたうえで見直してみると、王がいかに不屈の人であつたか――

